

行方不明の椿たち 加茂本阿弥と窓の月

園芸品種の研究にあたって、形態的で植物分類学的な観察の手法は、似ている品種を区別するのにとても有効な場合もあると思います。園芸品種の観察のその先鞭をつけられたのは牧野富太郎氏でしょうか。植物学雑誌の白佐助などの椿品種の記述はその本格的なものとして椿の研究者に影響を与えたと思います。

私の花栽培の先生の一人に、園芸文化協会の事務局長であった小山清氏がありました。植物学について面白い話をしてくれました。若い頃、牧野氏の植物採集の手伝いをしたことがあったそうですが、この時、牧野先生はいくつもいくつも同じ植物を採集されるのに驚いたと教えてくださいました。同じ種でも環境などによる形態的な変化を観察する目的で、生育環境の違う多くの標本が必要だったため、まるで無駄と思われるほど多くの個体を集めていたということが初めは理解できなかったそうです。

野生ではない園芸品種についても、同一個体でも多少の変化があることは言うまでもないことでしょう。椿の栽培においても、一般的には葉の大きさや葉身の波打ちなどは生育環境などによって変わります。明るく風通しの良い乾いた環境の方が葉は小さくヨレはおおきくなる傾向があり、暗く湿潤な生育環境のほうが葉身は大きく平になると思います。ですから品種間の違いを見るときにもこの点に注意してください。生育地が違う場合など単純に比較しては判断を間違える場合があるかも知れません。よく知る品種でも違うものに見えることもあるので、二つの似た品種を比べるのはこの点が難しいことと思います。

つまり、同一品種の形態的な変化の幅をつかんでからでないと、他の品種と区別するファクターとはなりません。このような変化は植物体の栄養状態など様々な要因によって、いろいろな部分に現れる場合があります。花形や花卉の数、雄蕊や雌蕊についても変化し易い場合があります。私はそれぞれの園芸品種についてもこの点に注意して何度も同じ品種を観察するように心がけています。栽培家として、品種を解説したり、同定したりしなければならぬ場合に備えるためです。

さて今回ここで問題にしたい椿品種は加茂本阿弥と窓の月です。

以前私は加茂本阿弥の桃色花の枝変わり品種を発表し。農林種苗登録をしたことがありました。嵯峨本阿弥です。今日の加茂本阿弥と思われる光悦椿が、剪花翁伝前編（中山雄平1847刊）に記述されていて、その花変わりに嵯峨本阿弥の名が出てきます。この品種は絶種しているのでこの名を拝借したものです。

このときこの加茂本阿弥の枝変わり花がすでに発表されているのは登録できずに困るので、類似の品種について調べたことがありました。少なくとも加茂本阿弥やその類似の品種である窓の月などについても、濃桃色の枝変わりは知られていないことを確認したものでし

た。このときお世話になった中に、当時の日本ツバキ協会の理事の方々もありましたが、白花である窓の月については、どのような品種なのかは特に問題にはなりません。

私のところにあった加茂本阿弥については、いわゆる本物で疑問の余地はないと考えていたからです。また、窓の月については加茂本阿弥の別名と考えられると聞いていたからでもあります。関東地方では窓の月という品種名はほとんど使われることもなく、わたしも加茂本阿弥以外は知るよしもありませんでした。むしろこの問題を放置していたのかもしれない。

しかしながら名古屋地方では窓の月という品種は評価が高く大切に栽培されていると聞いています。殆どの専門家は加茂本阿弥と窓の月は同じものであると今では認めています。ところが、一般的には、名前が違っていることから、いまだに加茂本阿弥と同一であるかについて、はっきりしていないようにも感じられます。加茂本阿弥が関西系の品種であるので文化圏が違っていることも判断を難しいものとしているのかもしれない。園芸品種名はそれぞれの地方での文化に支えられているものですから、必ずしも統一する必要はないと思います。しかし、同一品種であるのかないのかは確認しておくべきであると考え直して見ました。

そもそもの話、私のところにある品種が本当に加茂本阿弥なのか、あるいは窓の月なのか、それとも全くの別種なのかさえわからないのです。どちらかの名前にプライオリティがあるのかなどの問題について言っているのではありません。何かははっきりと確かめる手立てがないだろうかと考えて本文を書いています。嵯峨本阿弥の母木となった加茂本阿弥は、父が植木で求めたものでどこから求めたものか今ではわかりません。(もしかすると嵯峨本阿弥は「赤窓^{あかまど}の月」と呼んだ方がよいのかしら?) 今更ながら初心に帰って考えてみようと思います。

さて、私は以前黒椿について、園芸大辞典(石井勇義 1949)に花卉の数が12~13枚と記されていることなどから、別の黒椿があったのではないかと推測しています。現在知られている黒椿は花卉の数がもっと多く20枚以上あるからです。また、今までの栽培経験上では園芸大辞典ほど花卉の数が少なく咲いたことはありません。そんなに花卉の数が少なく咲くというのは栽培上の変化の幅を超えているからです。古くからの栽培家を訪ねたり、植物園など古い木を見て回ったりしましたが、もう失われているのかこの別系統の黒椿を見つけ出すことはできていません。

またこのように2つの品種を区別する必要があったのが、朝鮮椿^{こうみやう}についてです。光明^{こうみやう}と熊谷^{くまがえ}の雌蕊の特徴が違うことから、両種がどのような関係であるかを論文で述べました。一本雌蕊の椿は古い品種である熊谷ではありえない事を説明しました。さらには古文書の絵などから、朝鮮椿が熊谷と同一品種であることも突き止めることができました。しかし今だに一部の園芸書などを信じる人は、光明の名札を熊谷の名札に付け替えてしまう方も

ありましたので、混乱は続いています。

私は光明と熊谷の違いについて花の雌蕊や葉の形の違い、つまり一本雌蕊（光明）と花柱基部、子房の付け根部分まで分岐する雌蕊（朝鮮椿＝熊谷）の花があることや、朝鮮椿の方が葉は長く大きいなど葉の形の違いについて詳しく説明しました。

しかしそれらの特徴は一つの品種のなかの変化の幅で、それを適当に特徴としてあげつらえているだけだと思われてしまうと意味をなしません。そのように考えてしまう方は、もう詳しく観察しようとしなくなるのです。ある椿の生産者は両方の品種を親木として持っているながら、咲いている木の前で花や木姿の違いを私に指摘されるまで 2 本の親木が別系統であることにすら気づいていませんでした。ある品種についてあり得る変化の幅とあり得ない変化の幅があるのです。植物分類学的な形質についても多くの花や葉を観察して、その形質の変化の幅を見定める事が出来ないと、品種を区別するスキルとはならないのです。

さて、加茂本阿弥と窓の月に話を戻せば、多くの園芸書の中で、2つの品種は同一であるとしているものが目立つものの、戦後の椿ブームのときから 2 つは別の品種として扱われている場合もあります。このときでも、先に述べたように椿の花や葉姿などは栽培されている環境によって変わることもあることから、違って見えることもあり得るわけです。

例えばですが、開花前の膨らんだ蕾から少しだけ雌蕊が飛び出す性質が 2 つの品種ともにあるとされるのであれば、窓の月にも加茂本阿弥にもその特徴が確認できた場合はその雌蕊の特徴だけでは両品種を区別できないという事になります。2つの品種は同一である可能性が高くなり、他の特徴を見さだめなければならなくなります。花の大きさの違いは栽培上の変化で変わりやすいと言えるでしょう。そのように植物学的に重要な形質を注目しながらこのふたつの品種について考えてみようと思います。

信頼できると思われる椿園芸の解説書に、加茂本阿弥と窓の月はまったく別の品種と考えざるを得ない記述があります。

日本椿集（1966 平凡社）は二口善雄氏の絵によって椿品種を紹介し、植物学者の津山尚たかし氏が解説しています。その品種についての記述は植物分類学的なところが、一般的な園芸書よりも詳しく観察され調べられている部分があります。この本の中で津山尚氏は両品種を実際に観察し、はっきりと 2 品種のそれぞれの形態的な違いについて解説しています。

[窓の月]と[加茂本阿弥]は 51 番目と 52 番目にならんで紹介されています。二口氏の絵はそれぞれ窓の月を氷室花子氏（1965. 3. 10）、加茂本阿弥は、埼玉県立植物見本園（1965. 3. 10）のものを見て描かれています。津山氏がどこで現物を見たかは残念ながら記されていません。両種が似ているという認識があるので一部対比している記述があります。私の判断で重要と思う部分を抜粋して書き出します。この記述は詳しく検証しなければならないと思いますが、その上で、場合によっては、私のところの加茂本阿弥自体も考え直

さねばならないかもしれません。

日本椿集の記述を引用します。

[窓の月]は「白色一重抱え咲き中輪・・・花卉は5～6個、横広で、先端に深い凹入部があり、・・・『加茂本阿弥』にくらべて花卉の数がすくない。・・・葉は角張った広楕円で、葉縁は外曲し、先端は急に狭まって小凸頭となり、肩の部分にくせがあり、しばしば左右が不等・・・葉身は『加茂本阿弥』より小型、・・・枝は立性で伸びがよい。・・・」

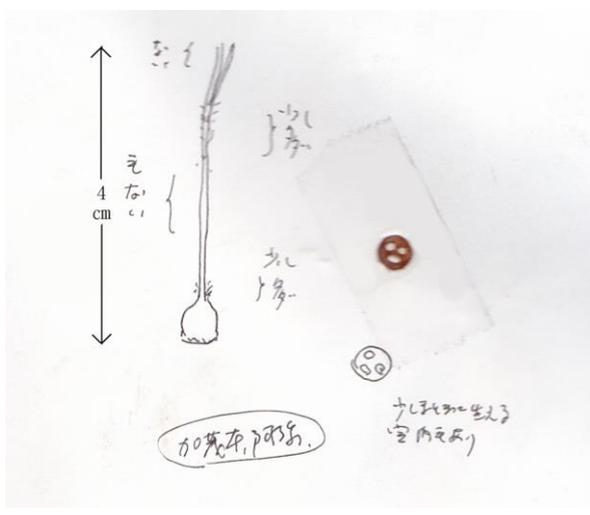
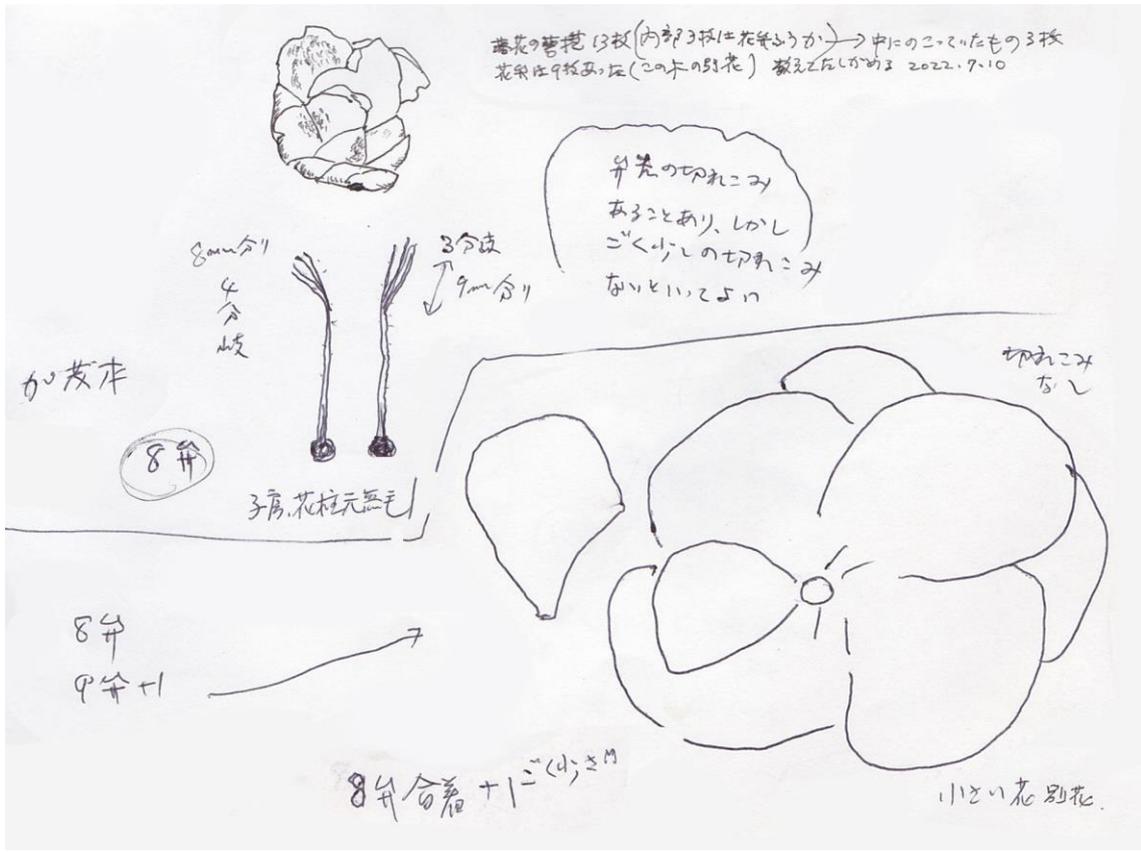
「加茂本阿弥」は「雪白色一重大輪。・・・花卉は6～7個で広く大きく、・・・つぼみは太く丸く、開花前にその先端から雌蕊の先端を1～2mmばかりのぞかせているのは、他の品種に例をみない特長である。雌蕊は、満開のものでも、先端まで分岐せず、あるいは極少ししか分岐しない。花柱基部に毛がある。・・・葉は長楕円形で・・・」（葉の大きさ、樹姿に立性などの記載はありません。）
(以上、日本椿集から原文どおり)

ここに記述のある特徴の「窓の月」という品種を私は見たこともないのでご存知の方はぜひ教えてください。この品種の特に注目すべき特徴だと思うのは花卉の凹入です。（凹入とは、欠刻、切れ込みのことではないのでしょうか。）深い凹入がある花びらは大変に印象的で、他に例を見ないのではないのでしょうか。葉は「肩の部分にくせがあり、しばしば左右が不等」と説明がありますが、このくせが無ければもう少し定形な葉の形で似ているのは角葉白玉の葉形でしょうか。（別名、盆白玉、臘月）角葉白玉はむしろ大きな葉になることがあり、横張性ですから樹姿はまったく違っています。窓の月は長円形（角張った広楕円形）の丸葉でより小さい葉を持っている品種ということになります。

さて一方の「加茂本阿弥」についても植物学者の観察は詳細で、雌蕊（しずい）の形態も詳しく記述されていることに驚きます。また、私が注目したのは葉の形です。長楕円形の葉を持っていると記されています。「加茂本阿弥」の葉形は一般的な椿の葉形に似ていることになります。

私のところに昔からある加茂本阿弥についてこれらの点に注目して観察してみました。写真と備忘録のような簡単な観察図を示します。







写真とスケッチの説明

遅く咲いた鉢植えの加茂本阿弥の花です。(2022・4・26) もう少し大輪に咲くのが普通ですが、咲きのこった名残花は写真の花よりもう少し小さい花もみえます。花弁の数がわかるようにマジックインキで番号を振りました。この花は花弁を数えやすいように広げて花径は8 cmほどでした。花びらが8枚見えます。花の裏面に小さな花弁が1枚合着していて、合計9個花弁がありました。別の花では分離弁が1枚あり10個花弁のある花も見ています。左下の写真は枯れた萼苞と雌蕊です。萼苞片は10~13個ほどでした。枯れた雌蕊の長さは3 cm で先は8 mm分岐しています。別花では、もっと大きく咲く花では花柱が基部から3 cmのものでは1 cmほど分岐しています。花柱先まで分岐しないで合着しているものは見ていません。花柱基部には毛が生えないものが多いと思います、普通、子房の少し上から分離部までまばらに伏毛が生えています。また基部にまとまって毛があり、その上には毛が見えず分岐部付近にまた毛が見えるものも見ています。花柱基部にだけ毛が生えるものは見ていません。子房は3室、4室(花柱4分岐)のものも見ています。子房の表面毛はありませんが室内毛は生えています。

(雌蕊の毛の生え方は他の品種について調べた経験ではある程度の多様性があることがあります。肉眼では花柱が無毛のものを見た記憶がありますが、ルーペでよく見ると先のほうには生えているようです。) 葉姿も私のところの加茂本阿弥です。ご覧のように葉は楕円形で、むしろ丸い葉形をしています。日向の葉身は中肋で少し中折して外へ反曲し、葉縁

は少し波打ち、外曲しています。手前右の葉で葉柄を含めて葉先まで長さ 8,5cm 幅 4.5cm ほどでした。(先から 2 番目の葉) これが平均的な葉姿だと思います。(2022・7・22) このように津山氏の観察とちがっています。つまり津山氏の「加茂本阿弥」と私のところの加茂本阿弥は一致していません。

二口善雄氏が描いた花は、窓の月も加茂本阿弥もどちらの花もおおむね正面から描かれています。花の裏側に何枚花弁があるのかなどは描かれていませんのでわかりませんが、描かれている絵のおもてからどちらの品種も花弁を数えようとすれば、7 枚数えることが出来ます。窓の月は開ききっていない状態で描かれています、加茂本阿弥は大きく開いた花が描かれています。また、内弁の一つが山折れしている特徴も同じように描かれています。すなわち、絵全体からの私の判断では、二口氏の絵の窓の月も加茂本阿弥も同一品に見えます。私のところにある加茂本阿弥と 3 品とも同一品と思われます。二口善雄氏の絵は洋画風ではありますが、園芸家から見ると、その実物の特徴をむしろ細密画より正確に捉えているところがあり、言うまでも無いことですが素晴らしいものです。したがって二口氏の描いたものと解説は乖離^{かいり}しているものです。絵と解説が一致していないのはそれぞれ別々に作成されたためと思われます。

話は余談のようになりますが、月見車のように、筒咲きの呼子鳥などと混同されたあげくに、筒咲きの品種を「関東月見車」と名前を変えて江戸時代からの本来の月見車と区別されるようになったものの、依然として植物園や個人などいくつもの系統が見られます。(江戸時代からの月見車は本来平咲きのもので、名古屋地方に伝えられていたものが正当な品種で、わざわざ「中部」とする必要はありません。) 今後とも園芸品種は新しい品種が加わって増え続けてゆくでしょう。これからの栽培家や研究者は、このような植物分類学のような詳しい観察を踏まえてそれぞれの品種を観察、同定しなければならない必要性がさらに増すでしょう。

さて、この日本椿集の中には、ほかの専門家や研究者の名前をあげて見解が違うことを述べている部分があります。p. 38 蟹小舟についての記述です。4 品種についてすべてが同一系統ではないとする人たちの意見に対して、「・・・『藻汐』『沖の浪』『釣篝』『蟹小舟』を通じてその枝、葉を調べ、また古文献を総合して判断すると、これら 4 品種は互いに枝変わりの関係にあることがわかる。・・・」として同一系統であるとしています。この津山氏の見解には同意できません。私もほかの専門家などに賛成です。文献については、それぞれ別の品種としていると思います。それぞれが枝変わりであることを示唆するような記述が古い資料に見つかったとしても、ともかくも現在知られている 4 品種は 2 つの個体系統からなると思います。前 2 種と後 2 種は花形や木姿や葉姿共に違って別系統の品種です。花色以外は藻汐(赤花)と沖の波(縦絞り花)はまったく同じです。釣篝(釣篝)と蟹小舟(赤花)は横杓や星があるかないかの違いだけで他の形態は変わりません。

つまり 4 品すべてが、同一の枝変わり関係にあるとは思えません。4 種が同じ系統ならば、沖の浪の赤花が藻汐であるのですから、それに横空（モザイク斑）が入ったのが鉤篝と言う説明になります。この鉤篝の白い斑^{まだら}が抜けたのが蟹小舟であるとする、藻汐と蟹小舟が同一品種ということになってしまいます。それなのにそうは言っていない。赤花同士である藻汐と蟹小舟がどう違うというのでしょうか。私のところの藻汐と鉤篝の葉姿のカラーコピーを示します。葉形が違います。



この鉤篝からはときに赤花も咲きます。これを藻汐であると判断してしまうと、藻汐が 2 系統できてしまいます。花形も栽培家から見ると同じではありません。

絞り花の春の台には時に星が入ることがあります。この場合枝変わり花の赤花にも星（白い斑^{まだら}模様）が出ることがあります。しかし、私の経験では、沖の浪にも同系の藻汐の花にも星や横空が出るのを見たことがありません。全く出ることはないとはいいきれませんが、そうすると藻汐系の別の鉤篝ができてしまいます。

園芸品種の微妙な違いは区別するのが非常に難しいものとされます。長い栽培経験を経て初めて違いがわかるものもあるのでしょうか。そこで私は、似ている品種を説明し、紛らわしい品種を区別する手段として積極的にこの分類学的手法を用いてきました。しかし園芸品種は明確な違いが見いだせないような微妙な違いによって区別されている場合があります。植物の形態的な分類は、どこどこに毛が生えているとか無いとか、小さな柄が

花にあるとか無いとか、子房の毛の有無などで明確な区別点があります。しかも生育している場所、自生地などが違っていることによっても、分類できるものもあります。しかし、自生地を持たない園芸品種はそれさえも無い訳ですから、同定するのは難しいものが多いのです。

植物分類学的な種の区別では葉形の少しの違いや、花びらの数、花形の僅かな違いは問題になりません。A REVISION OF THE GENUS CAMELLIA において、ツバキ属の分類学的な見直しをしたロバートシーリー氏も、その著書のなかで種においても一定のヴァリエーションがあることを認めています。その点では藻汐と蝨小舟に少しの違いがあることを認識しているとしても、植物分類学的には区別する必要のないものと考えるのは可能でしょう。種としてのカテゴリーの基本的な点を捉えた上で、少しの違いを無視しなければ分類することができません。しかも分類学上の考えはそれぞれの学者などの個人的な考えによって変わるものですから、研究上違う意見を述べるのは当然のことです。

一方、園芸品種は極小さな形態的な違いに注意を払い、園芸文化的に統一した個体をはっきりと区別する方向が求められています。いわゆる本物志向もあります。そのために、園芸文化的な裏付けとして、古文書の発掘や研究が必要なのです。その点では加茂本阿弥など多くの品種では、特徴がはっきりとわかる図絵など詳しい資料が不足しているのが現状です。(そのような古い資料をご存知の方があれば、宜しくご指導いただければ幸いです。)

さて、窓の月は名古屋城内に原木があり、戦災で焼失する前の大正中期に枝分けされたものをもとに量産されたと伝えられているそうです。そういう文化的な観点からの研究も重要なことですが、それに先立って、自生地（原木）のなくなってしまった園芸品種については、市中にあり、園芸愛好家が実際に栽培している実物を確認しなければなりません。つまり「窓の月」や「加茂本阿弥」の現物を詳しく観察することがなによりも、第一番目に必要なことになるのです。

そこでこの日本椿集の記述が重要なヒントになりはしないかと考えるものです。花の細部や葉の形については、椿の愛好家と言えどもあまり詳しく観察していないと思われます。花の鑑賞には直接関係のない事柄ですが、この機会にその重要性を理解していただきたいと思います。詳しく観察することはその品種のよりいっそう深い理解につながることを信じています。

生前津山先生とは西武デパートでの日本ツバキ協会の椿展示会などで何度もお会いして、椿についての話をしたことがありました。ほとんど一日中つばき展の会場に居られることもあってしばしば立ち話をしたことを懐い（おも）だします。時間を巻き戻すことができるなら、あのときに戻ってご教授いただきたいことがたくさん残っているのにと後悔しています。

さて、私は長く椿園芸に携わっていますが、正確な品種を取り扱いたいと心がけています。また、正確な情報を椿の愛好家と共有したいと思います。私自身も植物園などに植栽

されているものを詳しく観察しようと考えています。つきましては、丸い葉がやや小さくて、花弁の先が大きく凹入するという「窓の月」を教えてください。葉が丸くなく、雌蕊の先がほとんど分岐しないで咲く「加茂本阿弥」も探しています。そもそも写真や観察図で説明した私のところの加茂本阿弥は皆さんのところにある加茂本阿弥と同じ品種なのでしょうか。さらにこれらとは別の加茂本阿弥や窓の月を見たことがお有りでしょうか？

私が私のところの加茂本阿弥とは色々の点で違うので別系統であると考えている赤加茂本阿弥や秀月も同じようにそれぞれの母個体の枝変りと言われています。似ているから誤認した（枝変わりだと思い込んだ）のでなくて、赤加茂本阿弥が加茂本阿弥の、秀月が窓の月の枝変わりであるとするれば、その元になった別の白花の品種が市中に在ることになります。加茂本阿弥や窓の月とされる品種には、言わば[白花の赤加茂本阿弥]や、[白花の秀月]が紛れ込んでいるはずですが、赤加茂本阿弥と秀月は花色以外も違いますからそれぞれの白花個体もそれらの名前でも呼ばれていても別の個体です。その事を慥かめるためにも、どの木から出来たのかその元の木があるはずですが、その品種を探しています。それぞれの母品種が見たいと思います。これらも別の加茂本阿弥（別の窓の月）ということになります。つまり、津山尚氏の解説の2品種と合わせると、少なくとも別系統の5品以上の椿個体が市中にあるという問題だと思われれます。これらの品種の母木の情報なども、また、本文についてもお気付きの点がありましたら是非お知らせください。椿愛好家の皆様にお願いいたしましてこの小文を終ります。

江戸椿研究会 野口慎一

2022・8・10